

文久の政変と秋月悌次郎

中西達治

はじめに

本稿では、文久の政変前後から禁門の変にいたる時期の、会津藩と悌次郎の動きについて考察を進めたい。その際、原資料の引用に当たっては、原意を損なわないように配慮しつつ、読みやすさのため送りがな等を付し、現代仮名遣いとした部分がある。また出典等については、読解の便を図り、本文中に組み込んで示した。

一

足利三代將軍木像梟首事件以後の、秋月悌次郎の動きを概観しておく。

文久三年三月十一日、孝明天皇が、賀茂社に行幸して攘夷祈願をする。この時將軍家茂はじめ京都在留中の諸侯も随従した。これは京都市民に天皇の権威を誇示する結果となった。

三月二十二日、上洛中の將軍は参内して東帰の許可を請うが、朝廷はこれを許さなかった。ところが將軍府は二十三日、將軍の東帰という布告を発する。容保はこれを知らず、このことを知った会津藩士らは、もし東帰が実行されれば、違勅となるとして激昂し、公用局の面々が手分けして朝廷、幕閣、在野の要人を訪問して東帰阻止の論陣を張った。この時悌次郎は、松坂三内と共に、一橋慶喜、水戸家関係者の武田耕雲斎のもとに出向いている^{注1}。

大激論の末、東下中止の命令が下されたが、この時会津藩士数百人が、

二条城に押しかけ、將軍発駕の節は諫止しようと殺氣立っていたという。(北原雅長『七年史』)

公用局のメンバーが手分けしていっせいに要人宅を訪問する場合、公用局内での統一見解を元に行動するというのが、基本ルールである。会津藩は、京都守護職としての大局的な見地から一斉行動に出たのである。こうした見方を可能にしたのは、秋月悌次郎等の地道な情報収集と的確な分析があったからだと思われる。

三月二十五日、悌次郎は単独で幕府側御用取次村松出羽守を訪ね、將軍の東帰についてその不可を演説している。彼の現状分析と、問題解決策がどのようなものかを知るのに非常に都合がよいと思われるので、以下に掲げる。

大將軍は御帰京の後直ちに御東下の結構ありと密に聞知せり。是果して何の心ぞや。今や攘夷の命下りたるも、向ふ所を知らで、天下洶々たり、仮令大將軍関東にいますも、殊に上洛して禁裏御直衛を当然とすべきの時なり。然るに御上洛中なるは至幸と云へし、加之公武一和の実末だ見るべきものなし、此の如くにして、御東帰あらば、何を以て一和の功驗なりといふことを得べきや。又想ふに、国中和せざれば、何を以て外夷を攘ふことを得べきや。抑今度の御上洛は、公武一和の御為ながら為すべき所を為さざるに終らば、御上洛もまた無用の長物たるのみならず、其幕威を損

すること、極めて深し、共に悌次郎が解せざる所なり、苟も一和の実宜しきを得ば、御東帰亦可なり。然らずして、御還府あらば、讒誣交々起りて、再び挽回の機無きを信ず。某おもふに、先づ禁裏の費額を饒かにし、京都の旧弊を洗滌し、耳目を一新せば、創めて外藩を鎮撫するを得べし。事爰に至らば、激家十三卿の如き、おのづから威権を失し、大將軍の実権尽く、挙らん事難きにあらず、此時を待て御東帰あらば、又善からずや。某閔白殿下と、宮との態度を察するに、皆我に左袒せらるゝが如し、況んや主上の御聖明なる、大將軍に優遇を賜ふを伝聞して、叡慮のある所を推測し奉れば、感泣するの外なし、強て我を敵視する者、廷中十三卿に過ぎざるが如し、某等粉骨尽力せば、宜しきを得るも難きにあらずるが如し、故に今日の要務は、大將軍断然京師に御滞留あつて、百年の大計を示し、旗下の士気を安からしむるに在り。旗下が江戸の家族婦女の如きは、仮令応接不幸にして開戦に至るも、避難の地を与へて、凍飢の憂なき事を示しあらば、旗下の士心自から安からん。『七年史』

將軍家茂公は、帰京後すぐに江戸に帰るといふ計画があるとのことだ。これはどういふことか。今現在、天皇から攘夷の命令が出されているけれども、幕府の決定はないため、どうなることかと世人は心配している。將軍がもし京都にいなかったら、すぐさま上洛して將軍自ら皇居を守るべきだ。こんな時將軍が上洛中と言うことは願ってもないことだ。さらに、いまだに公武一体の成果がない。このまま江戸に帰ったら、今回の上洛で、どういう成果を得られたといえるか。一方また、国内が一致していなければどうして外敵を払うことが出来ようか。そもそも今回の將軍上洛は、公武一和のためだというのに、なすべき事を何もしなければ、上洛自体が無用の長物であるばかりかかえって幕府の威厳を損なうこと夥しい。とても自分には理解できない。一

和の効果が上がったうえでの江戸帰還ならば結構だが、今のままなら讒言悪口が充満して以後幕府の勢いは決して挽回できなくなってしまうだろう。私が思うに、まず皇室の歳費を増額して、京都における旧弊を一気に洗い流して、面目を一新すればこの時こそ異議を唱える大藩を抑えることが可能になるだろう。それさえ出来れば、過激派の朝臣十三人は自然と威勢を失い、將軍が実権を掌握するのは難しいことではない。そうなるから江戸に戻らればよい。私が、閔白殿下（この時は、鷹司輔熙）と中川宮との態度から推察すると、彼らは幕府の味方である。まして天皇は聖明、將軍を優遇されたとのこと、そこから天皇の気持ち推測するならば、ありがたいことである。何かも幕府を敵視するというものは、朝臣中十三名に過ぎない。私たちが粉骨碎身して力を合わせる事が出来たら、好結果を得ることは間違いない。今は非ともなすべきことは、將軍は京都に留まり、そこで幕府百年の計を示して、幕府の部下の大名、旗本達の士気を鼓舞することである。幕臣達の江戸在住の家族達については、万一の場合交渉がうまくゆかず不幸にも開戦となった場合でも、避難場所をはっきりさせて生活に不安がないように取りはからえば、自然と幕臣の気持ちも落ち着いてくるはずである。

これが悌次郎の発言の全容である。これを聞いた村松出羽守は、「そのとおりだ。貴君はまず、尾張の老公（徳川慶勝のこと）に話すべきだ。しかし、絶対に外に洩らしてはならない。」と答えたという。

二

公武一体を実現するための方策として悌次郎が提案したのは、將軍が率先して天皇を守り抜くという姿勢を見せること、皇室の歳費を増額すること、その上で京都の弊害を取り除くこと、そうすれば幕府の姿勢に異議を唱える諸藩も抑えることが出来、幕府の威厳も維持されるという、あくまで現実的で具体的な処理法である。問題の根源には、

皇室歳費が少なすぎることがあるという点に言及しているところに注目しておこう。皇室の歳費という経済問題としてこの時期の紛争を捉える視点は類例を見ない。朝廷の経済環境を好転させれば、幕府の意向も通しやすくなる、過激派の公卿はたかだか十三氏に過ぎないという情勢分析は問題の核心をついている。幕府の開港不可避の認識は変わっていない。開戦云々という言葉及ば、幕府関係者内部で話題となっていた、攘夷鎖港を実行したとたん外国軍隊が攻撃を仕掛けるに違いないという受け止め方を背景にしたものだと思うが、あくまでそれにいたる以前の話し合い決着を前提にしていることは明らかで、彼自身が攘夷賛成ということでは決していないことは注意しておくべきだろう。この論立てで分かるように、梯次郎は、幕府の權威の維持のため朝廷との関係をどうしたらよいかを考えている。彼の関心事は、現在あるシステムをもっとも効果的に運用するにはどうすればよいかというその一点にある。彼の思想の根幹にあるのはもちろん朱子学である。儒学は本質的に為政者が為政者としてあるべき姿を求め続ける学問であり、現状のシステムを超えた新しいシステムを求めるのが趣旨ではない。会津藩があり、幕府があり、朝廷（天皇）がある、そうした為政者である三者の関係が過不足なく機能する方策を求めることこそ梯次郎の学問の本質である。彼が純粋な佐幕、公武合体論者であったことは、岡鹿門が、その著『在臆話記』中で証言している。幕府と朝廷、尊王攘夷諸藩が所謂勤皇の浪士達を交えてせめぎ合いを続けている京都において、京都守護職という藩の立場を背景に直接彼らと交流し、施政の方針を貫こうと働く最前線にある梯次郎の時世認識のたしかさがよく分かる。

ただ、残念なことにこの提案が具体化されることはなかった。この時期、幕府側は混乱の極にあった。三月九日、松平春嶽は突然朝廷に政事総裁職免職願いを提出、二十一日には幕府・朝廷の裁可を待たず

独断で帰国してしまった。この時に限らず、春嶽は直情的に行動するきらいが目につく。彼には、じっくり腰を落ち着けて事態の解決を図るという視点に欠けるところがあったことだろう。朝廷側は、四月十一日、前月の賀茂兩社行幸に続いて天皇が石清水八幡宮に行幸、攘夷祈願をした。この行幸直前、前関白二条斉敬は、孝明天皇の石清水行幸の際暴徒が皇居を襲い祐宮（後の明治天皇）を奪おうという計画があるとの風説を聞き、京都守護職の松平容保に守備を要請したため、容保は、梯次郎・広沢安任等に命じて宮門外を警護させるというようなこともあった。（『京都守護職始末』）

三

幕府側は攘夷派の攻勢をともに受けて、四月二十日には、来る五月十日を攘夷期限とすることを無理矢理決めさせられてしまう。その内容は、これまで交流のあったオランダ、清までをも排除するむちゃくちゃなもので、仕方なく一橋慶喜は二十二日、対応策を立てるため將軍を残して江戸に向かった。この時期江戸では、開港論者が中心となっておりイギリスに生麦事件の償金支払いを決定するなど、妥協的な施策をとっていた。五月八日神奈川に着いた慶喜は、神奈川奉行に償金支払いの差し止めを命じるが、拒否され翌日支払われた。この日夕方江戸に戻った慶喜は幕府内の調整がうまくととのわず、五月十四日、將軍後見職辞職願いを関白鷹司輔熙にあて送付、翌日には家茂にも送った。

この時賠償金問題解決のため京都から江戸に戻っていた小笠原長行は、横浜で支払いに立ち会ったあと江戸に戻り、慶喜等幕府要人と話し合い、千数百名の兵士を引き連れて神奈川から海路上洛の途についてた。賠償金支払いについて説明のためということだったが、この時、過激派を一掃するという風聞が流れた。小笠原長行は、六月一日大坂に着き、京都に向かうが、在京老中等は京都の人心の動向を憂えて小

笠原の入京を阻止、次いで大阪に控えよとの將軍の親書が出る。この時、小野権之丞、秋月悌次郎の二人は容保の命で小笠原に会い、天皇の命であるとして入京を差し止めるよう説得している。

四

後年（明治二十三年）悌次郎は、『刀史』（所持していた刀の来歴に托して自分史を語ったもの。）を著すが、その第一「枕城刀一名護身刀」の中でこの時のことを以下のように記している。

この年五月、老中小笠原長行が兵を率いて入京するというので物情騒然となった。船が大阪に到着すると、朝廷は容保に兵を揃えてこれを迎え撃てという命令を下した。容保は、兵を用いるまでない。家臣を送って説得するだけで十分だとして、悌次郎と小野某を派遣した。（その時この刀を携えていた。）旅館で小笠原にあった悌次郎は、朝議で小笠原一行を京都に入れることが禁止された。何かわけがあつてのことだろう、容保がこのことを伝えるようにと私たちに命令されたといった。この時向山榮五郎と水野痴雲二人が小笠原と同行していた。二人とも才幹のある人物だった。そこでひそかに彼になぜ来たのか聞いたところ、彼は「三港の開港という勅命を実行することは不可能である。これは今までの経験からはっきりしている。」と極めて条理にかなったことをいう。さらに続けて「今外国との関係を絶てば、内政に支障が出る。外交交渉にも成果が望めない。進退窮まったからには死ぬしかない。貴君私を殺せ。」と。激烈な言葉だが憂国の至情が溢れていた。これが六月二日のことである。

こう書いた後に悌次郎は、

この時將軍家慶は京都にあつて、老中水野忠精に、小笠原がやってきたわけを問いたださせている。小笠原は、重大なことなので直接將軍に面接した上でないと話せないといったが、將軍は小笠

原に大坂待機を命じた。

と注を加える。この時の対応について悌次郎は、彼らに異心はなかったとしてはっきり後悔の念を記している。もしこの時小笠原が上洛して將軍に直々委細を報告していたら、朝議は変わっていただろう。彼らはもとより暴卒を扇動するものではない。また、因循姑息な守旧派とも全く違っている。いまにしてそう思う。惜しいことだったと。

この時流れた風説については、二十余年後のことだが、旧水戸藩士長谷川清が悌次郎を訪ねてきて、たまたまこの事件の話になった時「あの件については自分たちにも罪がある。」といったとも記されていて、この時期の京都の政情の一端を垣間見ることができる。いずれにしても君命を第一として、そのために尽力する悌次郎の姿がはっきり見える事件である。結局小笠原はこの後六月十日に罷免されることになった。

この間、攘夷期限の五月十日に、長州藩は関門海峡に停泊中のアメリカ商船に向かって発砲、事態を一層複雑化させる。^注こうした行動は、世界の状況を全く認識していない非常識な行動だが、幕府が出来なかった攘夷の直接行動に出たという点で、京都の都市人や浪士達には高く評価された。

六月十三日、將軍家茂は天皇の許可を得て江戸に帰る。（大坂より船に乗り十六日江戸到着。）江戸に帰った家茂は、即日一橋慶喜に会い、辞職を却下、慶喜は改めて幕府立て直しの中心となって動き始めた。

五

家茂や慶喜が江戸に戻り、孝明天皇の意向である攘夷という方針を、政権担当者としてどのように受け止めるか、調整が続けられている時、京都では全国規模での攘夷実行の動きが、長州藩士や久留米の神官真木和泉等によって計画される。その計画の中味は在京の有志がいっせ

いに挙兵し、過激派公卿の協力の下に天皇を奉じて禁裏から大坂辺へ行幸を仰ぎ、攘夷の勅命を発するというもので、天皇本人が思い描いていた公武一体のもとの攘夷という、温和な姿勢とは全く異なるものであった。孝明天皇の異母妹和宮が家茂の正室であったこともあって、もともと天皇には、攘夷論者ではあるが、尊王攘夷運動が示した反幕、倒幕という姿勢は全くなかった。朝廷からの政策提案が、天皇の意志とは関わりなく過激派公卿によって決定されるというような事態が何度も発生、過激派の独走が目に残るようになった。

六月二十五日、容保は宮中に召された。そこで関白鷹司輔熙から、攘夷の件について將軍を糾弾する勅命を傳達され、勅命を持って將軍の真意を確かめるため容保自ら関東に下向することを命じられるに至った。これに対して容保は、攘夷の即時実行が出来ないのは事情があるためとし、勅命の不可なことを奏上、今の状況では関東下向は絶対出来ないことを辞退するが、既に決定したこととして許可されなかった。

翌二十六日、容保は状況説明のため、野村佐兵衛を三条実美、小野権之丞・小室金吾を鷹司関白・近衛前関白、大野英馬を徳大寺大納言、広沢富次郎を豊岡大藏卿、秋月悌次郎を長谷三位の許にそれぞれ派遣して下向不可の説得をさせた。長谷三位は、至急の用なのですぐ命を受けるべきだという。『七年史』、『会津守護職始末』によれば、今回の問題は、三条実美等が真木和泉等と共に謀って会津を京都から遠ざけるために仕組んだものだったのだが、天皇は実情を知っていたため、一旦裁可したものの事態を憂えて密書二通を伝奏に托し容保に渡すよう命じた。この時伝奏が拒絶したためやむなく近衛前関白を通じて容保に伝えた。たまたまこの時小野権之丞が近衛殿に行っていたので、近衛公からこの関東下向無用の宸翰を渡された。この時容保は、公用人等を居間に呼び対策を考えていたが、この内勅を受けたので、先の命令を返上して京都に留まると願ひ出、二十八日、朝廷は容保の請願

を許可しこの件は決着した。三条実美等過激派公卿の妨害で、天皇の意志が全く通らなくなっていることをがよく分かる。

將軍家茂と將軍後見職慶喜が江戸にあり、政事総裁は不在という事態に、京都守護職容保はただ一人京都にあって幕府と朝廷との関係を調整するのに悪戦苦闘していた。

六

この時期真木和泉は、各方面に積極的に働きかけている。七月七日には、会津藩邸に秋月悌次郎を訪ねてきていることが分かっている。『真木和泉遺文』活動家真木の面目躍如ということが分かるが、それと同時に、悌次郎の交際範囲の広さにも留意しておきたい。先にも述べたように長州藩は真木和泉等の策を受けて、天皇親征を画策していた。この計画に真っ先に賛成したのが三条実美である。この動きを心配した孝明天皇はひそかに近衛忠熙を通じて島津久光の上洛を促した。もともと薩摩藩島津家は天璋院篤姫を十三代將軍家定の正室として入れていたこともあり、公武合体派の中心として動いていた。島津久光は、薩摩藩十二代藩主忠義が彼の実子であった関係で、国父と称され藩政に大きな影響力を持っていた。彼は、先年勅使として幕政改革を促すため江戸に向かい、帰途生麦事件を引き起こした当事者であるが、江戸に向かう直前には有馬新七等過激な薩摩藩関係者を暗殺させている。(第一次寺田屋事件。不思議なことにこの時の犠牲者達は、後に靖国神社に祀られた。)しかし彼は、藩内では公的立場を持たないので、正式に召命がなければ動けないといってきた。島津家からの働きかけもあり久光召命の勅が出されたが、国事係の三条実美等がこの勅命を不可として猛反発し、長州藩も国事係のメンバーに猛烈に働きかけた結果激しい抵抗にあり、遂に七月十七日総参内となり天皇の面前で議論が紛糾、三条実美が強硬に反対した結果、天皇の意に反して久光召命の不可を奏聞するに至った。

七

五月十日の長州藩の攘夷実行による異国船襲撃を受けて、朝廷では攘夷派諸藩が後に続くことを期待したが、全くその動きが見られないため、七月十九日になって関白鷹司輔熙は在京中の諸侯を呼んで攘夷親征について意見聴取をした。この時因幡鳥取藩の松平慶徳は、「攘夷親征はいいとして、主上以下公卿の人々は軍事について何も知らないのに、それが可能か。親征というならまず軍事訓練から始めなければならぬ。幸い会津藩は守護職なので軍兵が多い。我々在京諸藩も相応に兵力がある。これら諸藩の武装の実態を知った上で、砲声にも慣れたあとでなければ、親征の議論は出来ない。」と一蹴した。その他の諸侯も賛成者はなく、鷹司輔熙自身も親征反対なのでこの議は取り下げになったが、これは長州藩家老増田弾正が鷹司邸で親征を強硬に主張した結果だったという。

ところがこの会議の結果、意外な方向に事態が展開する。二十四日朝廷から伝奏飛鳥井正典を通じて会津藩に、来る二十八日（雨天順延）御所建春門前において天覧の馬揃えを実施するので準備せよという命令が下った。馬揃えとは小規模の軍事訓練で公卿一般が軍事に疎いという発言を受けてのものであり、実戦さながらに行ってこそ意味がある。ところが小銃空発禁止、大砲に至っては装薬点弾さえ禁止されるという有様で、何のためかと思議だったが、聞いてみるとそこで会津藩士が勢いに乗じて実弾を発射することをおそれたとのことで、そんな様子でもよくも親征云々といえたものだ、聞いたもの一回いぶかしみ笑ってしまったという。これらはおおむね『七年史』に記すところであるが、悌次郎の「刀史」にもほとんど同じことが書かれている。

七月二十八日は雨が降ったので三十日に繰り延べになった。三十日も雨だったので会津藩では実施を見合わせようとしたところ、当日実行という命令があったので、降雨中午後三時過ぎから操練開始、馬揃

えは日没後まで続いた。訓練の様子は篝火をたいてもはつきりとは見分けられないほどだったという。

八

この軍事訓練は孝明天皇をたいそう喜ばせた。早速恩賞の沙汰があり、さらに、五日に再度今度は空発を交えた実地訓練を行うようにという命令である。五日午前五時頃から始まった二度目の馬揃えで、訓練は夕刻まで続き、操練後容保は篝火の下天皇から古例に則り賞詞と恩賜の目録を受けている。会津藩が藩としてもっとも華やかに耀いた時といえようか。

表面的には攘夷激派の動きが抑えられたかに見えたこの時、攘夷過激派の画策は親征云々という議論の中で、天皇を直接動かすという方向に転換、十三日朝廷は、

今度為攘夷御祈願、大和国行幸、神武帝山陵春日社等御拜、暫御逗留御親征軍議被為在其上神宮行幸之事、

と攘夷祈願・親征軍議のための大和行幸を宣布するに至った。

九

こうした朝廷の動きに、穏健派の在京藩主等は危機感を募らせた。これより先、十日に土佐藩士下許武兵衛、生駒清次が三本木の会津藩公用局員の住居を訪れて、土佐藩の真意は公武一和であることを強調した。主君山内容堂はもとも過激派を好んでいない。土分の過激派は都を去らせた。今都に残っている土佐藩の過激派は士分以下の者達だけだ。武士半平太などがその例で、彼らは自分が認められるようにという思惑で堂上貴族に取り入っている。容堂はこのことを非常に心配している。以後情報交換を密に行きたいということで、それ以来往来が緊密になったという。薩摩藩では、久光の公式上洛の具体化を図るなかねてから穩健な対応策をいろいろ考えていたが、ここに来て過激派の公卿と戦闘的な長州藩を朝廷から排除する方策を模索して

いた。薩摩藩士高崎佐太郎が秋月悌次郎を訪ねてきたのは大和行幸の勅令が出た当日である。彼が悌次郎を訪ねたのは、会津藩との関係プレーの可否を探るためだった。

この時の高崎の訪問について、『執筆録』は、高崎佐太郎が「突然トシテ我等ノ旅寓ニ来リ」、所懐を述べたのに対して「大野英馬、松坂三内、柴秀次、秋月悌次郎及安任等」が受け答えをしたといい、『七年史』でも、「薩州藩高崎佐太郎正風、会津藩公用局員を三本木に訪うて、秋月悌次郎、広沢富次郎、大野英馬、柴秀次に説いて曰く」と、相手を特定しないで来ているかのように書いているが、『京都守護職始末』では、「薩摩藩士高崎佐太郎今の正風、我藩秋月胤永等の寓居を訪ひ」とあり、彼の発言を受けて「胤永等素より」その気持はあったので、すぐさま黒谷の容保に伝えたところ、容保は早速「胤永をして佐太郎と共に中川宮に候して、事の由を」伝えたところ。この件は、個人として話を受けた悌次郎が、公用局の運営法に従い、そこにいたメンバーを同席させたということである。高崎と悌次郎の間には、これ以前は全く面識がなかったという。それにもかかわらず薩摩藩が交渉窓口として悌次郎を選んだのはなぜか。悌次郎が諸国漫遊した折の人脈の豊富さはよく知られている。それ以外にも、文久二年夏、容保が京都守護職に就任した直後には、桂小五郎と機密情報の交換をしていたことや、同年十二月京都において催された勤皇志士の招魂祭にも列席している。（『持続する志六』）この直前には、真木和泉も彼を訪問している。佐幕攘夷を問わず、この時期京都に集まっていた人たちの間で、是非の分かる人物として会津藩士の中で彼の知名度は飛び抜けて高かったのである。

十

この時の高崎佐太郎について徳田武は、その著『会津藩儒将秋月章軒伝』において、

文久三年の八月十三日、薩摩藩士高崎佐太郎（正風）が甲冑を着けて（第十一章四参照）、突如、会津藩の広沢安任の宿に來たり、

と書いている。悌次郎を訪ねたのではなく広沢安任を訪ねてきたというのは何を根拠にしているのか分明ではないが、それはともかく念のため十一章四を見てみると、これは明治二十五年悌次郎が第五高等学校教授時代に高崎正風と再会した時、往時を回顧して作った漢詩に、

君着戎衣我札衣 一身許国死如婦

銃槍相擬將開戰 緋甲猶看映禁闌

とあることにより、徳田は「この詩に拠ってこそ、初めて当時の章軒と正風の服装が明らかにするのである。」という。これはこの詩の第一句の表現をもととした推定であるが、彼も同じ文脈中に書いているように、高崎正太郎が悌次郎（徳田の説によれば広沢安任）のもとを訪れたのは十三日、ここに描かれている二人の姿は、その後、所謂八月十八日の政変当日、悌次郎が礼服で中川の宮に咫尺し、佐太郎は薩摩藩士として宮中を警護し外敵排除に当たっている姿を写したもので、いくら何でも平日こっそり訪問するのに甲冑姿ということはあり得ない。徳田は、この詩について読解批評したのに続けて、五高の修学旅行で鹿児島を訪れた時の詩

生不相逢死相弔 足音能達九泉不

举鞭一笑敗余卒 亦是行軍入薩州

を解説して第三句についていわく、「敗れた私の方が教鞭を執って甲冑という、人生の皮肉を笑っている。」と解説、さらにこれに続けて「章軒は、西郷とは、文久年間京都でしばしば会っていたであろう。」という。「挙鞭」はもちろん行旅の譬喩である。教鞭云々は悌次郎の現在の境遇に引き寄せすぎた解釈であり、皮肉というにはもっと切実な心情吐露である。西郷隆盛は、よく知られているように、文久二年

六月徳之島に遠島を申し付けられており、許されて本土に戻ったのは元治元年のことである。何を根拠にしているかという言説が出てきたのか全く理解できない。この部分に限らず本書には筆者の思い込みによる読み間違い、当時の制度に無知なための誤解、全く根拠のない空想による断定が余りにも多すぎる。ついでにいえば、韋軒というのは、悌次郎の雅号である。彼は自分の人生を韋軒という雅号を持つ隠逸の人として生きたのではない。社会での通名は、幕政時代から明治五年罪を許されまでは、悌次郎、明治新政府に仕官して以後は胤永である。

木戸孝允が松菊という雅号を持ち、功成り名を遂げた人物として松菊木戸公という例のあることは承知しているが、彼の場合、いうとすれば「韋軒子錫秋月悌次郎胤永」というのが正式の呼び方である。悌次郎の儒者としての面を評価しての韋軒ならば納得が行くが、藩儒でもなく将帥でもない彼を、「会津藩儒将秋月韋軒」というのは、どういうことか、なぜそういう書名としたのか一言有ってしかるべきではないかと思うのである。

十一

この時の高崎の言説の大意は『京都守護職始末』によれば次のようなものである。

近來勸旨として発表せられたるもの多くは偽勅にして、奸臣等が所為より出でたるは兇等が知る所の如し、聖上之を知り賜ひ、屢々中川宮に謀り賜へ共兵力を有する武臣の清側の任に当るものなきを歎き賜ふと聞く、我輩之を聞いて袖手傍観する能はず、思ふに此任に当る会津と薩摩と二藩あるのみ、希くは、共に当路の奸臣を除き、勸慮を安ぜん

これを聞いた悌次郎が、すぐさま黒谷の会津藩本営の容保に注進に及んだということは先に記した所である。以下事は隠密裡に運ばれた。まず悌次郎と佐太郎が中川宮邸に赴き説得に当たる。天皇の信任あつ

い近衛前関白と二条右大臣については薩摩藩がそれぞれ説得に当たることとしていっせいに行動開始、十六日の夕方に行った天皇から中川宮に勅があり、それを受けて十七日夜、宮の令旨によって、緊急に過激派を排除した会議が招集され、実美以下議奏国事掛二十数名に禁足、他人面会を禁止するという命令を下すに至った。この時禁門を鎖し、会津藩・薩摩藩・所司代の兵が警護した。長州兵が大挙して押しよせたが、排除され、なお不穏な動きを見せた三条実美以下七名には朝廷から追究の命が出たため、彼らは長州に退去した。七卿都落ちである。この時真木和泉も長州藩士と共に長州入りしている。これが所謂文久の政変といわれる宮中クーデターの顛末である。この時京都のそうした動きに気づかなかった元侍従中山忠光等は、十七日拳兵し、五条代官所に乱入して奉行以下を殺し代官所に火をつけた。天誅組の乱とよばれたこの乱は、九月二十七日壊滅した。

この事件後会津藩と薩摩藩は、京都における政局の中心に位置づけられることになった。初めに見たとおり、この計画の主役は薩摩藩であり、会津藩は呼びかけを受けた側である。その点に留意した上で、以後に備えるという視点のなかったことが、以後の会津藩の運命に大きく影響してくることになる。

十二

文久の政変で一変した政情のもと、これまで斥けられていた松平春嶽などが出馬を求められることになる。十月七日、朝廷より春嶽に上京せよとの命が下る。これを受けて春嶽は江戸表に届け出の上上京、謹慎させていた中根雪江の蟄居を解く。命に応じて雪江は十一月九日福井を出発し、十二日京都に到着した。この時雪江が、これまでの情報収集のためもっとも頼りにしたのが、誰であろう悌次郎だったのである。『中根雪江先生』には、

雪江は、十六日、会津藩の秋月悌次郎を訪ねて、八月政変を中心

とする京師政情の変動を尋問するなど、『続再夢紀事』、情勢を分析して現況を理解することに勉め、いよ／＼行動を開始する。とある。この後倅次郎は春嶽にも会っている。文久の政変のはじめ、高崎佐太郎が、会津藩との連盟を探るためまず訪ねたのが倅次郎だったことを思いおこしてみよう。会津藩外交の最先端に倅次郎はいたのである。やがて雪江は、これまで会津藩と共に行動してきた薩摩藩の小松帯刀等との連係プレーを展開する。倅次郎の存在の大きさがうかがわれる例の一つである。

国際情勢を見据えた開国派の政策と、陰に陽に過激な攘夷運動を仕掛ける危険分子の動向、過激派を嫌悪しながら攘夷を求める天皇とはざまで翻弄され続けた京都の幕臣や佐幕派の諸藩は、將軍と將軍後見職の再上洛を待ち望んでいた。条件付き鎖港交渉を諸国と続け、財政的にも厳しいにもかかわらず、局面打開のため、幕府が將軍の上洛を決めたのは、この年十一月である。十一月二十六日、慶喜が家茂に先だって海路上洛し、翌年一月十五日、家茂が京都に到着した。

慶喜の到着以来一気に京都の政局は動き始める。参与会議の創設とその解体など施政の根幹に関わる変革が行われる中で、幕府と薩摩藩など有力諸藩との関係が、過激派諸藩に対する対応の温度差などさまざまな亀裂を見せ始める。こうした状況の中で、秋月倅次郎が持っている情報、持つ可能性を如実に示している人的交流をどう考えるか、どう使うか、会津藩にはこの点を正当に評価する発想は全くなかった。この当時幕府は、攝海の警備に注力し、諸藩に対して砲台創設の候補地の選定など具体的な作業をさせている。この時會津藩からは、二月二十八日、小室等節と秋月倅次郎とが派遣されたという。政争の中枢から現場の実務担当への配置換えが行われたわけである。ところが、この攝海警備のための派遣という項を最後に、倅次郎の京都における消息が途絶えてしまう。倅次郎の身の上に何があったのか、この問題

を突き詰めて行くと、倅次郎評価を巡る会津藩内部の複雑な動向が見えてくる。

本稿了

【注】

注1 その他のメンバーの動向は以下の通りである。

大野英馬、河原善左衛門は閤老板倉周防守、水野和泉守に往き、秋月倅次郎・松坂三内は、一橋中納言及び武田耕雲斎に往き、広沢富次郎、柴秀治は、水戸の藩士に往き、小野権之丞、小室金吾は、尾張前大納言に往き、横山主税、田中土佐、丹羽勘解由、野村佐兵衛、外島機兵衛も又、尾州家に往く。

注2 倅次郎は、シャリから呼び戻される途中仙台に立ち寄り、岡鹿門を訪ねて仙台藩校の儒者氏家晋、藩士の玉虫左大夫と歓談した。その時玉虫は西国、九州地方を遊歴して帰国したばかりだった。当時の諸藩の情勢を語り合い時世論になった時のことを岡鹿門は、

玉虫佐幕、韋軒ト同論。更ニ酒肴ヲ命ジ改酌。余モ上国談ハ耳新ラシク、薩長藩情、一々意外。薩長ハ野心、佐賀ハ日和見、熊本ハ幕府ト憂喜ヲ同フスル等、皆人々所見。兩人ノ言ニ、天朝ヲ尊奉、幕府ニ恭順、左ナケレバ天下ヲ誤マルト。余、水戸ノ党論、大獄以来ノ事ヲ拳ゲ、天朝ヲ尊奉セバ幕府ニ不恭順、幕府ニ恭順ナレバ天朝ニ不尊奉、兩者不_二並立_一、此ハ孟子ニ云フ_二ニ_一其本_一ノ故也。然ラバ天下ノ一定マルハ、此兩者ノ並ビ立ザル、其一ヲ除ク外ナシト。韋軒、玉虫默然。

と記している。

注3 この後引きつづいて長州藩は二十三日フランス軍艦、二十六日にはオランダ軍艦を砲撃、これに対して六月一日アメリカ軍艦が長州藩砲台を報復攻撃して占領、六月五日にはフランス艦隊が長州藩砲台を攻撃占領、六月十日には仏・英・米・蘭の四ヶ国が横浜で長州藩攻撃を決定すると

いう予想もつかなかった展開になる。しかも長州藩ではこういう無謀な事件を引き起こしている真っ最中の五月十二日、藩士井上馨・伊藤博文等を横浜から密出国させイギリスへ留学させている。薩摩藩では、七月二日生麦事件の償金を求めて鹿児島にやってきたイギリス軍艦と交戦している。